

## 「海面上昇危機 どうするフィジー」

コース・専攻：国際交流・協力

グループ名：Bula フィジー

メンバー：郡司弘子、佐藤秀子、崩山慶一、橋倉正司、春田薫、川端広子

### 【テーマ設定・研究目的】

地球温暖化の進行により、海面上昇は深刻な社会問題として顕在化しつつある。日本でも低地の大都市が浸水リスクに直面する一方、太平洋島嶼国ではすでに生活基盤が脅かされている。

本研究のテーマ設定のきっかけは、フィジーの新聞「フィジータイムズ」に掲載されたフィジーのトゴル村の墓地が水没している記事である。フィジーは太平洋島嶼国の中で海面上昇対策が最も進み、かつ同地域で主導的な役割を果たしている。本研究ではフィジーの実態を把握することで、今後の日本の協力のあり方を考察し、今後、問題解決のために私たちに何ができるかについてまとめた。

### 【フィールドワーク】

#### 1. JICA フィジー事務所

- (1) 日本はハード面だけでなく人材育成などソフト面の支援にも力を入れている。気象衛星「ひまわり」を活用した気象予測能力の向上など日本の強みを活かした支援も多数実施している。
- (2) 国民の約6割を占めるフィジー系住民の特徴である共助の文化「ケレケレ」やおおらかな時間感覚「フィジータイム」が、世界で最も幸福な国の一つと言われる主な理由である。

#### 2. トゴル村（首都スバから車で約1時間）

- (1) トゴル村の海岸に着くと、海岸は浸食され、ヤシの木の倒木が何本も波打ち際に横たわっていた。その先の海で、先祖代々の墓が傾きながら建っていた。海面上昇が遠い未来の話ではなく、今起きている現実であることを思い知らされた。
- (2) 村長との偶然の出会いがあり、現状や思いを聞くことができた。彼は何度も“I like Japan”と繰り返し、日本からの支援に感謝してくれた。彼は移住を拒んでおり、「私はこの土地を守り続けたい。私は祈る。ここで待っている。」と語った。この言葉は単なる支援の要望ではなく、共に生き延びたいという切実な願いである。



海に建つ墓（2025.7.5 撮影）

### 【まとめ】

今後私たちにできることを以下の5項目にまとめた。

- (1) 世界に関心を持ち学び続ける。
- (2) 日々の暮らしを見直す。（節電に努める）
- (3) 身近な人たちと「温暖化」について話をする。
- (4) 国際協力への関心を持つ。
- (5) 体験したこと、感じたことを情報発信する。

我々は本研究で得た知識を広く共有するため、Note という SNS で情報発信している。

Note の URL は以下の通りである。

[https://note.com/haruchan\\_red/n/n03254573ad74](https://note.com/haruchan_red/n/n03254573ad74)



村長との対談の様子(2025.7.5 撮影)

